我が家の麒麟

銀夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
我が家の麒麟

【Ｎコード】
Ｎ９９６４Ｇ

【作者名】
銀夜

【あらすじ】
遠野煌治（とおのこうじ）という少年はいたって普通の高校生でした。ある日学校の帰りに友達たちと一緒にカラオケに行き、その帰りにとある生き物と出会ってしまいます。その生物こそ、伝説の生き物である『麒麟』だったのです。

第零話：麒麟が我が家に住み着いた経緯を説明いたします。

麒麟。

中国で聖人の前に現れると称される想像上の動物。形は鹿に大きく似て、尾は牛に、蹄は馬に似、背毛は五彩で毛は黄色。頭上に肉に包まれた角がある。生草を踏まず生物を食わないという。

又の名を東洋の一角獣。

そんな訳で神様的扱いをされている麒麟だがその麒麟が何故か家に住み着いてしまった。

前述した通りの姿ではなく見事に人間の、中学生くらいの少女の姿で朝から晩までテレビを見ている。

冷蔵庫の中を勝手に漁るわ、人の部屋に入ってベットを占領するわ、人の両親に凄く懐くわで俺の平凡な高校生活は完全に崩壊してしまった。　しかも我が愛犬ことローズマリー（ゴールデンデトリバー）にライバル心を抱いている始末。

全く、本当に勘弁して欲しいのだがどうやらそうもいかないようだ。

さっきまでお茶の間で人気なクイズ番組を見ていた目が今俺の方をじっと見ている。

こいつ黙ってたら結構可愛いのに今からその口から出る言葉が、何ともまあ素っ気ない。

「プリンないから買ってこい」　さてここで問題です。

今両親がいないこの家で一番偉いのは誰でしょう。正解は言うまでもなく俺だよな？

だがコイツに言わせたら絶っっっ対こう言うに違いない。

「我が一番偉いに決まっているだろう。だって我は麒麟だぞ？き・り・ん」

うん。

こいつのこと紹介してると段々腹が立ってきた。一発だけその

五彩に輝く髪の毛に覆われた頭をシバいてやりたい。
ていうかシバいていいよな？
当然、現在両親が外出中のこの家で一番偉い俺にはこいつをシバく権利がある。だが次の一言で俺はコイツをシバくことを諦めなければならなくなってしまった。
「おい煌治さっさとプリンを買って来い。お前のベットの下にあるナニを母様に密告するぞ」
「行ってきます」
言い忘れてたが俺の名前は遠野煌治（とおのこうじ）。
この自己チューで毒舌な麒麟がこの家に住み着く理由を作ってしまった、張本人だ。俺があの麒麟と出会った・・・　もとい、遭遇したのはつい六日前のこと。
学校が終わると同時に俺は帰宅の途につこうとしたが、我が愛する友たちがカラオケに誘ってくれたので一緒に行くことにした。
駅前のカラオケ店で三時間熱唱して店を出ると時間が七時を回っていた。
友人たちはチャリ通だったので当然颯爽と俺の前から走り去っていった。
この時
「新しいチャリンコが欲しいな～」なんて思いながら、心の奥底で両親への言い訳を考えながら駆け出した瞬間、背後で犬のような鳴き声がした。
気のせいだろうと思い再び駆け出そうとしたら・・・
「くぅ～ん・・・」
俺は犬のような鳴き声が聞こえた方向を見た。
そしたら、あらあらまあまあ。
蜜柑の衝撃吸収剤《段ボール》の中に、小さな目を潤ませてこちらを見上げている謎の生物がいた。

今時こんな典型的な動物との出会いがあるのか、と一人感心しながら俺はその謎の生物の頭を撫でていた。
気持ち良さそうに目を細める謎の生物。
だがこれ以上帰宅時間が遅くなってしまうと俺は恒例の、両親からの質問責めの刑にさらされかねないので、後ろ髪引かれながら俺はその場を後にした。
だがしばらくして自宅前にある交差点で赤信号にひっかかり、五分程信号が変わるのを待つ羽目になってしまった。
「やべーこりゃ質問地獄決定だわ」なんて思いながら待っていると、後ろからパカパカと馬の蹄のような音が聞こえてきた。
後ろを見てみた。
そしたら先程の謎の生物が目を逸らしていずこを見ている。
前を見る。
再びパカパカ音がする。
もう一度後ろを見る。
立ち止まる謎の生物。
「あっ！あれは何だ」
「へ？」
俺は虚空を指指して謎の生物がその方向に顔を向けた瞬間に駆け出した。
・・・ていうか今あの生物喋らなかったか？そんな事は気に止めず、俺はひたすら自宅に向かって走り続けた。
だが無情にも後ろからはパカパカと音が聞こえてくる。１００ｍを１５秒で走り抜くことができる俺はさらにペースを上げた。
「うぁあ！」
急なペースアップに付いていけなかったのか、足が突然バランスを崩した。
そして俺は見事に野球とかでよく見るヘッドスライディングをただでさえ固い、アスファルトの上で行うことになってしまった。
「あ、ヤバ」

その声が聞こえた約5秒後、俺は謎の生物に思いっきり踏み付けられた。いや、この場合『轢かれる』か・・・

この後の事は記憶が曖昧で正確な説明ができないが、麒麟によれば俺は軽い脳震盪を起こして１０分程気絶していたようだ。
そして気がついた俺に
「我は麒麟だ。早速お前の家まで案内(あない)せよ」と言った、らしい。
そしていつの間にか人間の少女に姿を変え、俺にトコトコ付いて来た。
この後両親に説明するのがどれ程しんどかったことだろう。
「まあ煌治が女の子を誘拐するなんて、お母さん煌治にそんな悪い事が出来たのに驚きだわ！」とオカン。
「何い！　煌治に出来る犯罪が有ったのか？　万引きか！　幼児誘拐か！」とオトン。
この二人を説得するのにどれ程時間が費やされたのかは、皆のご想像にお任せする。
結局、麒麟は『煌治が友達とカラオケに行った帰りに、ちょうどその場に身寄りの無い女の子が居たので可哀相と思って、保護した麒麟という名前の中学生』という名目で俺の家に住むことになった。
・・・今考えてみたらカラオケなんて行かなきゃこんな事にはならなかったんだよな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9964g/

我が家の麒麟

2010年10月9日07時29分発行